

中島敦全集

第二卷

昭和二十三年十月一日印刷
昭和二十三年十月五日發行
昭和二十四年十一月二十五日再版發行

中島敦全集 第二卷

定價 參百八拾圓
地方 四 百 圓
賣價

著 者 中 島 敦

發行者 古 田 晁

東・京・都・文・京・區・合・町・九

印刷者 小 坂 孟

東京都新宿區市谷加賀町一ノ三

發行所 株式會社 筑 摩 書 房

東京都文京區台町九
電話小石川區二〇〇五一番(業務)
振替口座東京一六五七ノ八

大日本印刷株式會社印刷・矢島製本

中島敦全集

第二卷

目 次

、 狼 疾 記	323
かめれおん日記	283
、 斗 南 先 生	243
環 礁	167
、 光 と 風 と 夢	5

光と風と夢

一

一八八四年五月の或夜遅く、三十五歳のロバート・ルウキス・ステイヴンソンは、南佛イエールの客舎で、突然、ひどい咯血に襲はれた。駈付けた妻に向つて、彼は紙切に鉛筆で斯う書いて見せた。「恐れることはない。之が死なら、樂なものだ。」血が口中を塞いで、口が利けなかつたのである。

爾來、彼は健康地を求めて轉々しなくなつた。南英の保養地ボーンマスでの三年

の後、コロラドを試みては、といふ醫者の言葉に従つて、大西洋を渡つた。米國も思はしくなく、今度は南洋行が試みられた。七十噸の縦帆船（スクリュー）は、マルケサス・パウモツ・タヒティ・ハワイ・ギルバートを經て一年半に互る巡航の後、一八八九年の終にサモアのアピア港に着いた。海上の生活は快適で、島々の氣候は申分なかつた。自ら「咳と骨に過ぎない」といふスティヴンスンの身體も、先づ小康を保つことが出來た。彼は此處で住んで見る氣になり、アピア市外に四百エーカーばかりの土地を買入れた。勿論、まだ此處で一生を終へようなどと考へてゐた譯ではない。現に、翌年の二月、買入れた土地の開墾や建築を暫く人手に委ねて、自分はシドニー迄出掛けて行つた。其處で便船を待合せて、一旦英國に歸るつもりだつたのである。

しかし、彼は、やがて、在英の一友人に宛てて次の様な手紙を書かねばならなかつた。

「……實をいへば、私は、最早一度しか英國に歸ることはないだらうと思つてゐる。そして其の一度とは、死ぬ時であらう。熱帶に於てのみ私は纔かに健康なのだ。亞熱帶の此處（ニュー・カレドニア）でさへ、私は直ぐに風邪を引く。シドニーでは到頭咯血をやつて了つた。霧の深い英國へ歸るなど、今は思ひも寄らぬ。……私は悲しんでゐるだらうか？ 英國にゐる七・八人、米國にゐる一人二人の友人と會へなくなること、それが辛いだけだ。それを別にすれば、寧ろサモ

アの方が好ましい。海と島々と土人達と、島の生活と氣候とが、私を本當に幸福にして呉れるだらう。私は此の流謫を決して不幸とは考へない……。」

その年の十一月、彼は漸く健康を取戻してサモアに歸つた。彼の買入地には、土人の大工の作つた假小舎が出来てゐた。本建築は白人大工でなければ出来ないものである。それが出来るまで、ステイヴンソンと彼の妻ファニーとは假小舎に寢起し、自ら土人達を監督して開墾に當つた。其處はアピア市の南方三哩、休火山ヴェアの山腹で、五つの溪流と三つの瀑布と、その他幾つかの峽谷斷崖を含む・六百呎から千三百呎に互る高さの臺地である。土人は此の地をヴィリマと呼んだ。五つの川の意である。鬱蒼たる熱帶林や渺茫たる南太平洋の眺望をもつ斯うした土地に、自分の力で一つ／＼生活の礎石を築いて行くのは、ステイヴンソンにとつて、子供の時の箱庭遊に似た純粹な歡びであつた。自分の生活が自分の手によつて最も直接に支へられてゐることの意識——その敷地に自分が一杓打込んだ家に住み、自分が鋸をもつて其の製造の手傳をした椅子に掛け、自分が鋤を入れた畠の野菜や果實を何時も喰べてゐること——之は、幼時始めて自力で作上げた手工品を卓子の上に置いて眺めた時の・新鮮な自尊心を蘇らせて呉れる。此の小舎を組立ててゐる丸木や板も、又、日々の食物も、みんな素姓の知れたものであること——つまり、其等の

木は悉く自分の山から伐出され自分の眼の前で鉋を掛けられたものであり、其等の食物の出所も、みんなはつきり判つてゐる（このオレンヂはどの木から取つた、このバナナは何處の畠のと）こと。之も、幼い頃母の作つた料理でなければ安心して喰べられなかつたステイヴンズに、何か楽しい心易さを與へるのであつた。

彼は今ロビンソン・クルーソー、或ひはウォルト・ホイットマンの生活を實驗しつつある。

「太陽と大地と生物とを愛し、富を輕蔑し、乞ふ者には與へ、白人文明を以て一の大なる偏見と看做し、教育なき・力溢るゝ人々と共に濶歩し、明るい風と光との中で、勞働に汗ばんだ皮膚の下に血液の循環を快く感じ、人に嗤はれまいとの懸念を忘れて、眞に思ふ事のみを言ひ、眞に欲する事のみを行ふ。」之が彼の新しい生活であつた。

二

一八九〇年十二月×日

五時起床。美しい鳩色の明方。それが徐々に明るい金色に變らうとしてゐる。遙か北方、森と

街との彼方に、鏡のやうな海が光る。但し、環礁の外は相變らず怒濤の飛沫が白く立つてゐるらしい。耳をすませば、確かに其の音が地鳴のやうに聞えて来る。

六時少し前朝食。オレンジ一箇、卵二箇。喰へながらエランダの下を見るときもなく見てゐると、直ぐ下の畑の玉蜀黍が二三本、いやに搖れてゐる。おやと思つて見てゐる中に、一本の莖が倒れたと思ふと、葉の茂みの中に、すうつと隠れて了つた。直ぐに降りて行つて畑に入ると仔豚が二匹慌てて逃出した。

豚の惡戯には全く弱る。歐羅巴の豚のやうな、文明のために去勢されて了つたものとは、全然違ふ。實に野性的で活力的で逞しく、美しいとさへ言つていゝかも知れぬ。私は今迄豚は泳げぬものと思つてゐたが、どうして、南洋の豚は立派に泳ぐ。大きな黒牝豚が五百碼も泳いだのを、私は確かに見た。彼等は怜悯で、ココナットの實を日向に乾かして割る術をも心得てゐる。獐猛なものになると、時に仔羊を襲つて喰殺したりする。ファニイの近頃は、毎日豚の取締りに忙殺されてゐるらしい。

六時から九時まで仕事。一昨日以來の「南洋だより」の一章を書上げる。直ぐに草刈に出る。土人の若者等が四組に分れて畑仕事と道拓きに従つてゐる。斧の音。煙の匂。ヘンリ・シメレの

監督で、仕事は大いに捗^{はかど}つてゐるやうだ。ヘンリは元來サヴィイ島の酋長の息子なのだが、歐羅巴の何處へ出しても恥づかしくない立派な青年だ。

生垣の中にクイクイ（或ひはツイツイ）の叢生してゐる所を見付けて、退治にかゝる。この草こそ我々の最大の敵だ。恐ろしく敏感な植物。狡猾な知覺——風に搖れる他の草の葉が觸れた時は何の反應も示さないのに、ほんの少しでも人間がさはると忽ち葉を閉ぢて了ふ。縮んでは蝨のやうに嚙みつく植物。牡蠣が岩にくつつくやうに、根で以て執拗に土と他の植物の根とに、からみ付けてゐる。クイクイを片付けてから、野生のライムにかゝる。棘と、彈力ある吸盤とに、大分素手を傷められた。

十時半、エランダから法螺貝^{マガ}が響く。晝食——冷肉・木犀果^{アウオガドオベア}・ビスケット・赤葡萄酒。

食後、詩を纏めようとしたが、巧く行かぬ。銀^{フラチオレット}笛を吹く。一時から又外へ出てグイトリンガ河岸への徑を開きにかゝる。斧を手に、獨りで密林にはひつて行く。頭上は、重なり合ふ巨木、巨木。其の葉の隙から時々白く、殆ど銀の斑點の如く光つて見える空。地上にも所々倒れた巨木が道を拒んでゐる。攀上り、垂下り、絡みつき、輪索を作る蔦葛類^{カブ}の汜濫。總狀に盛上る蘭類。毒々しい觸手を伸ばした羊齒類。巨大な白星海芋。汁氣の多い稚木の莖は、斧の一振でサクリと

氣持よく切れるが、しなやかな古枝は中々巧く切れない。

静かだ。私の振る斧の音以外には何も聞えない。豪華な此の緑の世界の、何といふ寂しさ！

白晝の大きな沈黙の、何といふ恐ろしさ！

突然、遠くから或る鈍い物音と、續いて、短い・疳高い笑聲とが聞えた。ゾッと惡寒が背を走つた。はじめの物音は、何かの木魂こたまでもあらうか？ 笑聲は鳥の聲？ 此の邊の鳥は、妙に人間に似た叫をするのだ。日没時のヴェア山は、子供の喚聲に似た、鋭い鳥其の鳴聲で充たされる。しかし、今の聲は、それとも少し違つてゐる。結局、音の正體は判らずじまひであつた。

歸途、ふと一つの作品の構想が浮んだ。この密林を舞臺としたメロドラマである。彈丸の様に其の思ひつきが（又、その中の情景の一つが）私を貫いたのだ。巧く纏まるかどうか分らないが、とにかく私は此の思ひつきを暫く頭の隅に暖めて置かう。鶏が卵をかへす時のやうに。

五時、夕食、ビーフシチュウ・焼バナナ・バイナッブルスクラレット。

食後ヘンリに英語を教へる。といふよりも、サモア語との交換教授だ。ヘンリが毎日々々、此の憂鬱な夕方の勉強に、どうして堪へられるか、不思議でならぬ。（今日は英語だが、明日は初等數學だ。）享樂的なポリネシア人の中でも特に陽氣なのが彼等サモア人だのに。サモア人は自

ら強ひることを好まない。彼等の好むのは、歌と踊と美服（彼等は南海の伊達者だ。）と、水浴とカヅ酒とだ。それから、談笑と演説と、マランガ——之は、若者が大勢集まつて村から村へと幾日も旅を續けて遊び廻ること。訪ねられた村では必ず彼等をカヅ酒や踊で款待しなければならぬことになつてゐる。サモア人の底拔の陽氣さは、彼等の國語に「借財」或ひは「借りる」といふ言葉の無いことだ。近頃使はれてゐるのはタヒティから借用した言葉だ。サモア人は元々、借りるなどといふ面倒な事はせずに、皆貰つて了ふのだから、従つて、借りるといふ言葉も無いのである。貰ふ——乞ふ——強請する、といふ言葉なら、實に澤山ある。貰ふものの種類によつて、——魚だとか、タロ芋だとか、龜だとか、筵だとか、それに依つて「貰ふ」といふ言葉が幾通りにも區別されてゐるのだ。もう一つの長閑な例——奇妙な囚人服を着せられ道路工事に使役されてゐる土人の囚人の所へ、日曜着の綺麗を飾つた囚人等の一族が飲食物携帯で遊びに行き、工事最中の道路の真中に筵を敷いて、囚人達と一緒に一日中飲んだり歌つたりして楽しく過すのだ。何といふ、とぼけた明るさだらう！所で、うちのヘンリ・シメレ君は斯うした彼の種族一般と何處か違つてゐる。その場限りでないもの、組織的なものを求める傾向が、この青年の中にある。ポリネシア人としては異數のことだ。彼に比べると、白人ではあるが、料理人のポールな

ど、遙かに知的に劣つてゐる。家畜係のラファエレと來ては、之は又典型的なサモア人だ。元來サモア人は體格がいゝが、ラファエレも六呎四吋位はあらう。身體ばかり大きいくせに一向意氣地がなく、のろまな哀願的人物である。ヘラクレスの如くアキレスの如き巨漢が、甘つたれた口調で、私のことを「ババ、ババ」と呼ぶのだから、やり切れない。彼は幽靈をひどく怖がつてゐる。夕方一人でバナナ畑へ行けないのだ。（一般に、ポリネシア人が「彼は人だ」といふ時、それは、「彼が幽靈ではなく、生きた人間である。」といふ意味だ。）二三日前ラファエレが面白い話をした。彼の友人の一人が、死んだ父の靈を見たといふのだ。夕方、その男が、死んでから二十日ばかりになる父の墓の前に佇んでゐた。ふと氣がつくと、何時の間にか、一羽の雪白の鶴が珊瑚屑の塚の上に立つてゐる。之こそは父の魂だと、さう思ひながら見てゐる中に、鶴の数が殖えて來て、中には黒鶴も交つてゐた。その中に、何時か彼等の姿が消え、その代りに塚の上には、今度は白猫が一匹ゐる。やがて、白猫の周りに、灰色、三毛、黒、と、あらゆる毛色の猫共が、幻のやうに音も無く、鳴聲一つ立てずに忍び寄つて來た。その中に、其等の姿も周圍の夕闇の中へ融去つて了つた。鶴になつた父親の姿を見たとき其の男は堅く信じてゐる……云々。

十二月××日

午前中、稜鏡羅針儀を借りて来て仕事にかゝる。この器械に私は一八七一年以來觸れたことがなく、又、それに就いて考へたこともなかつたのだが、兎に角、三角形を五つ引いた。エディンバラ大學工科卒業生たるの誇を新たにする。だが、何といふ怠惰な學生で私はあつたか！ ブラツキイ教授やテイト教授のことを、ひよいと思出した。

午後は又、植物共のあらはな生命力との無言の鬭争。かうして斧や鎌を揮つて六片分ベンスも働くと、私の心は自己満足でふくれ返るのに、家の中で机に向つて二十磅ポンド稼いでも、愚かな良心は、己の怠惰と時間の空費とを悼むのだ。之は一體どうした譯か。

働きながら、ふと考へた。俺は幸福かと。しかし、幸福といふやつは解らぬ。それは自意識以前のものだ。が、快樂なら今でも知つてゐる。色々な形の・多くの快樂を。(どれも之も完全なものとしてないが。) 其等の快樂の中で、私は、「熱帯林の靜寂の中で唯一人斧を揮ふ」この伐木作業を、高い位置に置くものだ。誠に、「歌の如く、情熱の如く」此の仕事は私を魅する。現在の生活を、私は、他の如何なる環境とも取換へたく思はない。しかも一方、正直な所を云へば、私は今、或る強い嫌惡の情で、絶えずヅツとしてゐるのだ。本質的にそぐはない環境の中へ